

岡崎市制100周年記念事業  
岡崎まちものがたり：六ツ美南部 M-30

## 岡崎 史跡と文化財めぐり

この資料は「岡崎 史跡と文化財めぐり」からの抜粋である。

岡崎 史跡と文化財めぐり

発行日：昭和52年8月1日、著作者 代表：岩月 栄治

編集発行：岡崎の文化財編集委員会 印刷所：（株）ヨシノ印刷所

P149：三 悠紀の里・六ツ美

P152：悠紀斎田（\*コラム）

P154：お田扇祭り（\*コラム）

P155：三 悠紀の里・六ツ美 ④占部用水

P164～P165：五 吉良の荘 ①長円寺と板倉氏

P166：かぎ万灯（\*コラム）

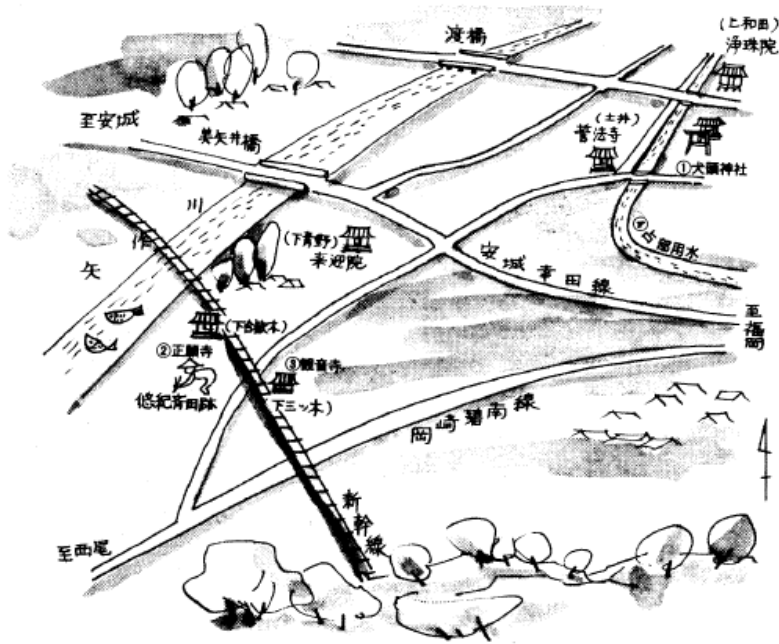
● 悠紀の里・六ツ美

三、悠紀の里・六ツ美

肥沃な矢作川の沖積地は、耕地整理もされて岡崎の穀倉地帯となっている。この流域の中島町に大嘗祭悠紀斎田跡がある。周り一面水田の中に、倉庫・草の生い茂る広場・記念碑・老松などのある一画が盛り土され、すぐ見つけることができる。

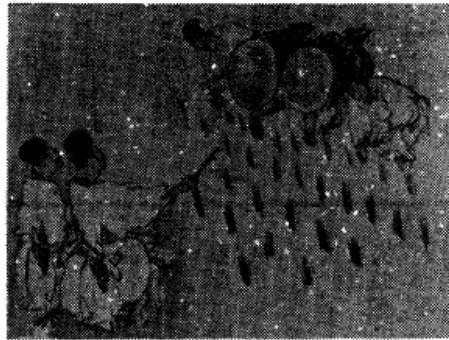
これより五キロメートル上流の自然堤防上の集落、宮地町には、慶長年間に建立された鳥居や狛犬のある犬頭神社がある。境内には、三河三奉行の一人で三河武士の hands といわれた本多左衛門の墓や、新田義貞の首塚と いい伝えられる祠などがある。松並木の参道や風情のある境内を散策しながら、この神社にまつわる伝説を古老から聞くのもひとつの楽しみである。

近くの比蘇天神社には、三代の将軍に任せ、数々の武功をあげた大久保彦左衛門をはじめ「大久保一族発跡」の石碑があり、史跡探訪にはことかかない。



悠紀齋田

大嘗祭は、天皇即位後初めてとれた新穀で神饌神酒をつくり、これを天照大神に捧げ、天皇自らも召し上がられるという、皇室の祭典の中でも最も重要な儀式である。数々の祭典の中でも大祭といわれるのは、この大嘗祭だけである。この大祭に必要な新米をつくる田を「齋田」といった。大正三年、齋田を選定する儀式の時に、京都を中心とした東日本を悠紀の地方、西日本を主基の地方と呼び定め、悠紀の地方には三河の六ツ美村が、主基の地方には香川県の山田村が選ばれた。面積は四反歩（四十アール）その周囲は一間幅を不浄除けにして約一、二メートルの通路とし、四メートルごとに葉つきの忌竹をたて注連縄が張られ、正門には黒木造りの通用



ま民俗資料として保存されている。

門があり、観音開きの戸扉がつけられた。耕作者は郡内各町村から特に優秀な者が採用された。作業にあたって、耕作者は決められた服装で、事前に身を浄め、おはらいを受けてから従事した。田植祭は、県内各都市の代表神職にあたる者三十余名が参加し、倭舞を舞い、田植唄にあわせて植えられた。参観者は一日七万人にのぼったという。「悠紀の里・六ツ美」の名声はここから生まれてきたのである。この行事に使用された衣類・器具・唄・踊り・通用門などの資料七百三十一点は下青野町の齋田記念館にそのま

## お田扇祭り

お田扇祭りは、正式には「皇大神宮御田扇祭」というが、普通「田扇」「お田扇」「扇さん」などというている。

扇さんは、岡崎藩六万石（公称は五万石）の村方を地域によって一万石ずつの六つに分けた「手永」ごとに、それぞれの大庄屋を中心に伝承されていた祭礼である。現在は、俗にいう「川東」と「占部筋」の六ツ美地区を中心に行われているだけである。

伊勢神宮では、御田植神事に稲の虫よけとしてひのき製の大きな扇が使われ、この神事を御田扇といった。これに因んで、神宮で作られた扇を各手永が請けてきて、田植えが終わると神輿に納め、七月中旬に手永内の各村々を巡回して稲を虫害から守り、豊作を祈願した。

しかし、この「扇さん」は民間の行事とはいえ、岡崎藩が自藩の安全と治安のために、村落支配組織であ

る大庄屋を中心にこの祭りを盛んに行わせたという。領主が費用を出している文書も残っている上に、田扇行列にある「本」（岡崎藩本多家）の字や、立葵の紋、また御神体の扇に書かれた馬の絵、赤丸の軍扇などから、祭りには武士的要素が入っていることを示している。



お田扇祭りの祭具

昭和五十一年に行われた田扇祭りは、下合歡木から高落に神輿が渡っていき、送る側も迎える方も村中総出の賑やかなものだった。

祭りに使う白杖、高張提灯、梵天・大幟・花傘・櫛桶・大幣神輿・大花傘・各町の赤旗などは、昭和五十一年現在・西尾市高落の神社に納められている。

#### ④ 占部用水

菅生川と矢作川の合流する地点（天白町地内）が水源である。沖積平野の水田の灌漑用水として、六ツ美地区二十町内に網の目のように張りめぐらされている。

本流路は八キロメートル、受益面積は九百六十一ヘクタールで、岡崎の用水路としては最大規模となっている。

昭和四十六年、天白町に合口用水が完成し、占部、高橋、高落の三用水はここから取り入れている。

##### ■歴史メモ

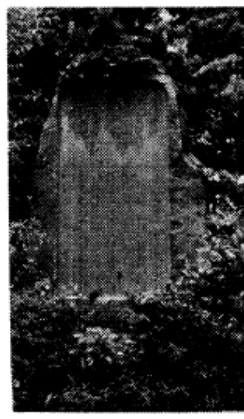
国正・中村、定国、正名は占部郷と呼ばれていた。平地でありながら、用水路がないため、降雨が続けば水害に悩み、晴天が続けば干害に悩んだ。

慶長の初め、正名の住人野本新十郎と中村の住人渡辺弥蔵は、武門に生まれ地方の名望家であったが、占部の用水開発を計画した。農民たちは、手間や費用がかかりすぎること、土地がつぶれること、水害の恐れがあることなどを理由に反対したが、二人は説得を続け、自分の田畑、山林を総て売り払い五年間を費やして完成した。

##### ■みどころ

▼思案橋 国正町地内。県道岡崎碧南線にある橋。待望の用水路は完成したが、野本新十郎や渡辺弥蔵の生活は完全に破壊され、妻子とは離散し家名も断絶した。農民のために手がけた仕事なのに、農民から反対された思案にくれた二人の気持ちを察して、完成後、だれいふことなく思案橋と呼んだという。

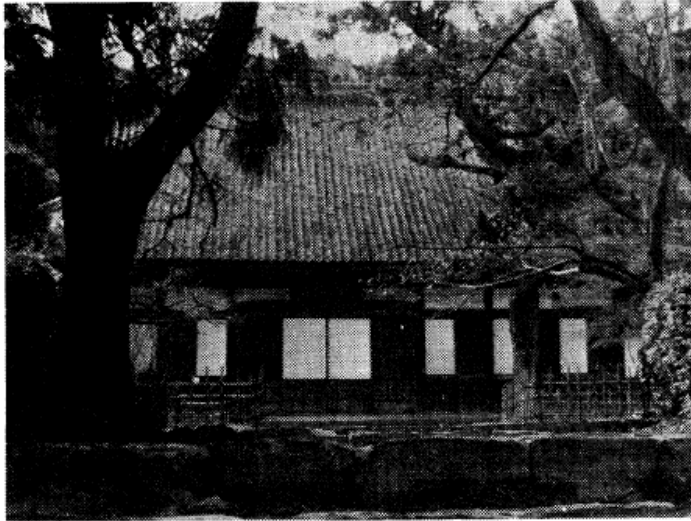
▼占部用水開発の御墨付 正名町総代宅所蔵。二人の熱心さを認めた幕府が「占部郷以外の村が用水を必要とする時は、一村につき五百文渡すこと」「くいが必要な時は代官が準備すること」等を約束した証文である。



占部川用水の碑

▼占部天神社 正名町。野本新十郎と渡辺弥蔵の二人が用水の守護神として祭られている。大きな石碑もある。また近くの永応寺では、毎年春先に、二人の遺徳をしのぶため水恩忌が営まれている。

① 長円寺と板倉氏



長円寺本堂正面

岡崎市の南、中島町にそって流れる広田川の橋を渡つてすぐ右に曲り、約一キロメートル行くと左手に長円寺への案内板がある。この寺は岡崎平野を前面に望む貝吹の丘陵にいだかれた曹洞宗の大寺である。

本堂（法堂）は天明年代（一八世紀後半）に、永平寺の大王が十三年の歳月を費やして建立したものと伝えられている。西に薬師山、南に万灯山、北に焼山の三山に囲まれた閑静な広い境内があり、山桜、もみじなどがみごとである。深い森と美しいこけに包まれたたずまいには、京の寺の趣きがある。

■歴史メモ

初代の京都所司代、板倉伊賀守勝重（一五四五〜一六二四）は、三河国額田郡小美村（岡崎市小美町）の生まれで、幼い頃出家し中島の永安寺にいたが、父、弟が共に戦死したため徳川家康の命で還俗した。その後、勝重は江戸町奉行、京都町奉行を経て京都所司代となった。

中島の永安寺は慶長八年（一六〇三）に長円寺と改め勝重の子重宗が寛永七年（一六三〇）にこの地に寺を移して万灯山長円寺となった。勝重以降、四家の大名、二家の旗本を出したが、これら板倉家一門はすべてここ長

円寺を総菩提寺と定めていた。

■みどころ

▼肖像堂 本堂のうしろにある板倉家の廟所で、寛永七年（一六三〇）に建立された。質素で江戸初期の代表的な造りである。堂の額字は石川丈山の書である。

勝重はじめ、その長子重宗（二代京都所司代で父に優る治績をあげた。とくに名裁判をうたわれ、講談の大岡裁きの場面はこの板倉裁きの逸話が多いという）次子重昌（島原の乱で討死）重矩（老中、所司代を務め老中時代に伊達騒動を裁く）、松叟（幕末の筆頭老中）など一門の人々がまつられている。

▼板倉勝重坐像・肖像画（重） 坐像は木像等身大で肖像堂にある。肖像画は紙本着色で狩野探幽作と伝えられている。

▼正法眼蔵写本・正法眼蔵随聞記写本 当山二代の、暉堂宋慧の手によるものである。とくに正法眼蔵随聞記写本は「長円寺本」として有名である。

▼覆醬集 石川丈山（一五八三〜一七六二）直筆の隸書の詩集である。丈山は安城の生まれで、徳川家康の近侍も勤めた。大阪夏の陣のとき、先陣争いを強行す

る軍律を犯したため武士を捨て、叡山の麓、一乗寺村の詩仙堂にこもった文人である。

▼本阿弥光悦の賛 肖像堂に通じる細い参道の脇にある自然石風のちようず鉢に、寛永三筆のひとりである

光悦（一五五八〜一六三二）の賛が彫られている。

▼松花堂三幅対 寛永三筆のひとりである松花堂（一五八四〜一六三九）書画である。

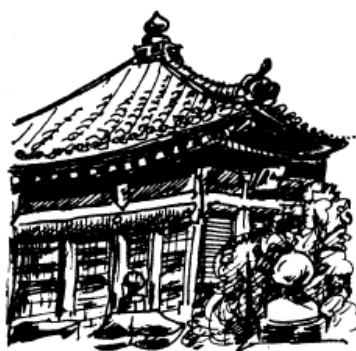
▼七福神布袋像 当寺は三河七福神布袋尊札所ともな

つており、布袋像は等身大で桐の一本彫である。

名鉄バス西尾線（江原経由）貝吹下車徒歩十五分

有

パンフレット 有  
〇五六三五―②―一〇〇二（西尾市貝吹町字油の木）



肖像堂

かぎ万灯



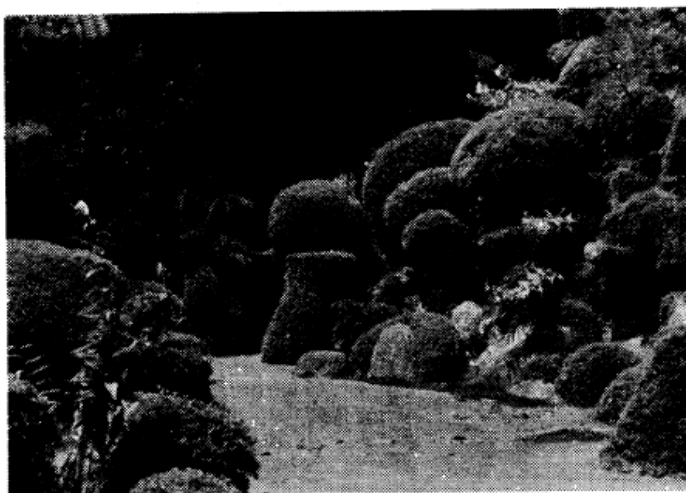
かぎ万灯

毎年、八月十四日のお盆の夜には、長円寺の南の山、万灯山の西斜面で「かぎ万灯」が行われる。

その由来は定かではないが、七八百年前より伝わるお盆の行事である。万灯山山頂に、むかしこの付近の戦の戦死者をとむらう千人塚があつて、その霊を慰めたのが始まりといわれる。カギの字形に並べた百八つの薪に火をつける。

百八つの送り火の、その火つきの良し悪しを見て里人たちはその年の豊凶を占うのである。

この火の城は遠く知多半島からも見える。漁師たちはその時船足をとめ、百八つの煩惱を洗いながら、遠い三河の火の山に対して合掌するという。



枯山水庭園

② 吉良上野介義央と華藏寺